

自宅に閉じこもり  
ふさがちになり

福岡市内にある平和台陸上競技場のトラックで、小柄な女性が伴走者と走っていました。道下美里さんです。

小学4年生のとき、右目を病に侵されてしまいます。膠様滴状角膜炎(ようたきじょうけつやうまく)という病名で、角膜にアミロイドという物質が沈着して徐々に視力が低下していく、進行性の難病です。

中学2年生になり角膜移植手術を受けますが、術後の経過は思わしくなく、右目は完全に光を失ってしまいました。右目は失明したものの左目が見えていたことから、日常生活にそれほど不便を感じず、高校、そして短大を無事に卒業し、調理師免許も取得しました。「おいしい料理は人を幸せにすることができずから、将来はレストランを経営したいと思っていたんです」と道下さん。しかし再び病に侵されます。23歳のときでした。右目と同じ難病が左目にも発症してしまつたのです。「料理に髪の毛が入っていたり、皿が汚れていたりするもの」

道下さん。  
平成28年のリオパラリンピック視覚障がい者女子マラソンでは銀メダルに輝き、平成29年の防府読売マラソン(T12クラス※)でも世界記録を樹立。今年4月にはロンドンマラソン兼ワールドパラアスレチックマラソンワールド

障がい者  
アスリートの挑戦

# 私は走る。夢は東京で金メダル

病気で失明した後、30歳代から本格的にマラソンに挑戦し、東京2020パラリンピック競技大会で金メダルを取ることを目標に走っている道下美里さん取材しました。

見えなくなりました。ああ、私の夢は終わったんだと思いました」。

落ち込む道下さんに、子どもの何気ない一言がさらに追い打ちを掛けます。「ある日、近所の小さな子どもが私の顔を見て『お姉ちゃんの目、怖い』と言ったのです。とても悲しくなつて」。

道下さんはふさがちになつたそうです。「いづれ左目も見えなくなり、何もできなくなる。人に迷惑をかけ続ける人生に、生きる意味があるのだろうか……」。自宅に閉じこもつた道下さんを、外の世界に引っ張り出したのは母親です。何人かの視覚障がい者に引き合わせ、盲学校入学を勧めたのです。

みんなの声援が  
背中を押してくれて

平成15年、26歳という年齢で盲学校に入学します。「学校の友達や先生と接するうちに、いったい私は何を悲観していたんだろうって思いました」と道下さん。体育の授業で、伴走者と一緒に走る経験をし、風を切つて走る楽しさを目覚めます。「私の左目は中

央が白く濁っているので、余光が弱いときは真横に人がいるのはわかりませんが、正面や足元は、ほとんど見えません。路面のちよつとした段差にもつまずきます。でも、人間って慣れるんですね。伴走してくれる人がいて、走るコースさえ記憶すれば、走れるんです」と笑顔で語ります。

走ることに喜びを感じて元気に活動しだした道下さん。当初は中距離走から始めましたが、沿道からたくさん声援があるフルマラソンに魅力を感じて挑戦します。「みんなの声援が背中を押してくれているようで、とても楽しくて」。マラソン人生の始まりです。

## 道下美里さんプロフィール

日本を代表するブラインドランナー。難病に侵され中学2年生で右目を失明。20歳代なかばで左目もほとんど見えない状態になる。その後、マラソンを始め、平成28年にリオデジャネイロで開催されたパラリンピック視覚障がい者女子マラソンで銀メダル(写真)に輝いた。山口県出身、福岡県太宰府市在住。41歳。三井住友海上所属。

結婚を機に福岡にくると、大濠公園を拠点とする「大濠公園ブラインドランナーズクラブ」のメンバーになり、フルマラソンに本格的に取り組みます。すると、まるで道下さんの熱意に動かされたかのように、市民ランナーたちによる「チーム道下」が結成され多くの仲間が支えてくれるようになりました。

カップでも2連覇を達成しました。  
失明したから  
見えるものもある

道下さんは語ります。「両親、夫、友達、先生、チームの仲間、会社、応援してくれる皆さんなど、たくさんの人に支えら

れて今があります。20代で両目が見えなくなつたからこそ、逆に見えるようになったことでもあります。ほんの15、6年前は、家にひきこもり、死ぬことも頭に浮かべていました。だからこそ、ひきこもつたり、障がいがあったりする人の気持ち、少しでも私が世間に

発信することができればと思っています。そのためには東京パラリンピックで金メダルを取りたい。みんなと喜びを分かち合いたい。だから私は走ります」。

※T12クラス 手の形を認知できる程度から視力0.03以下まで、または視野が5度以内の障がいのクラス



▲平和台陸上競技場を伴走者と走る道下美里さん(写真左)。2人を繋いでいる伴走ロープは『きずな』と呼ばれています

